

浦島君は搔き回したい～天才たちの恋愛頭脳戦は紙一重～

羊毛ローブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

浦島君はただ搔き回したい。それだけなのだ。

目 次

- 浦島君は搔き回したい ～天才たちの恋愛頭脳戦は紙一重～ | 1
浦島君はフォームが大事 |
浦島君は優しくしたい |

15 7 1

浦島君は搔き回したい　天才たちの恋愛頭脳戦は
紙一重く

秀知院学園

この学園は歴史が古く貴族社会の時の名残が残つており所謂お金持
ちの学校である。

そんな御貴族様が通つている学校の頂点が普通の人間に務まる訳
もない。

四宮かぐや

清楚可憐、才色兼備、品行方正、大和撫子であり四宮財閥の令嬢で
頭腦明晰、運動神経抜群というどこの漫画の完璧美人だよおい。とい
う突つ込みが入りそうなのが彼女であり秀知院学園の副会長である。
そんな彼女が副会長という役職なのは理由があるそんな彼女より
も上の存在がいるからに他ならないからである。

白銀御行

秀知院学園は昔からこの国を担う若手を輩出している事もありこ
こに通う人間は政治家の息子や医者の娘、果ては総理大臣の令嬢や天
皇陛下の御子息までも通つていた事もある。

そんな人間達の頂点たる生徒会長が普通の人間で良い筈がない。
彼は外部生でありながらこの秀知院学園で勉学一本で成り上がつ
た男である。

一芸ではあるが勉学ではあの四宮かぐやですら勝つ事ができず、更
に全国でも3本の指には入る勉学の鬼であるのだ。

更に彼の模範的立ち振舞いが評価されて誰もが認める生徒会長にな
つたのだ。

そんな二人が生徒会室で雑談している。

「そいいえば私達が付き合つてているという噂が流れているようですよ
？」

「ふむ、まあ皆そういう年頃なのだろう言わせたい奴には言わせてお
けば良い」

「ふふふ会長の言う通りですね」

(ふ……確かに俺に合う女等四宮位のモノだからな。まあ四宮がどうしても付き合つて欲しいというのであれば付き合つてやらん事もないな)

(四宮財閥の私が何故一般人と付き合うという発想になるのでしょうか?確かに会長ならギリのギリギリ及第点であるのは確かですし?会長が身も故郷も捧げるというのであれば付き合つてあげても良いでしよう)

恋愛とは戦である。

相手に好意があるという事を伝えておかないと自分の事を認知して貰う事すらできないし、他の相手に奪われる事もあるのだ。

だから恋愛は戦なのである。

しかしそんな恋愛を経て結ばれたとしてもその関係には上下関係があると考えている人間がいるそうな。

ともかくにもそんなこんなで惚れた腫れたの二人の恋愛がここに始まろうと……

「そんなこんなでもう白銀が会長になつて半年近く経つねえ……にしてもこの饅頭美味しいなあと一個しか残つてないのが残念」

していなかつた。

その半年の間にこの二人は「付き合つてやつても良い」から「相手にどうやつて告白させるか?」にシフトしていくたという変化はあつた。

「そうだな浦島も風紀委員長が板についたのではないか?」

「そうだねえ。四宮さんも大分雰囲気が丸くなつたよねえ」

「私は最初からこんな感じだと思っていましたが……」

浦島優良

秀知院学園の泣く子も笑う風紀委員長である。

彼も白銀同様に外部からの入学生であるが彼の柔らかい物腰と気策な立ち振舞いで生徒や先生からの信頼も厚い生徒会の二人と肩を並べる事のできる唯一と言つてもいい存在である。

因みに外部からの受験生であり白銀とは古くからの知り合いであります、よく実家からの食材を渡したりして仲が良いので一部の婦女子からは白銀とのツーショットをキャーキャーと呼ばれたりする。「そうですねえあの頃と比べると雰囲気が優しくなったなあと私も思います」

「もう……藤原さんも私を辱しめるのは辞めて下さい」

藤原千花

生徒会書記であり音楽という分野では他の追随を許さない圧倒的な才女である。曾祖父は元総理大臣であり叔父は省大臣をしているという政治家の家系であり、語学堪能で5ヶ国を話す事ができる優秀な人材なのだ。

「あ、そういうえば昨日恋愛映画のペアチケットが当たったんですけど親の方針で私はこの映画が見る事ができないので誰かにお譲りしようと思つていてるんです」

「そうなのか？ならその日は珍しく予定もない事だし……四宮俺たち：「何でもこの映画をペアで見ると結ばれるというジンクスがあるとか」んな！」

藤原千花からの何気ない一言が白銀にとつては痛恨の一撃である。つまりコレは相手をいかに自分に告白させるかという天才達における恋愛頭脳戦なのである。

「あらあら会長？今ペアで見れば結ばれるという映画にこの私を誘いましたか？」

（まーた何かやつてるわ）

浦島はこういつたやり取りを最近何度も見てる。比較的に観察眼がある浦島はこの二人が両思いである事は認識していく最初はお節介でも焼いてやろうと思つてた時期もあつたが、ここ最近は見ていて面白いから黙つている事が多くなつていて。

「ふむ確かに四宮を誘つたが俺はそういうたジンクスは気にしないが、四宮は俺とこの映画を見たいのか？」

（ありやまあ咄嗟にそんな返しよく思いつくなあ）
嘘である。

浦島は知っている。実際にそういうジンクスのあるという話を聞いて白銀という男はめちゃくちゃ氣にする事を。

どれぐらい氣にするかと言えば四宮との相性占いが良い結果にならないという事をマジ凹みする位には氣にする事を彼は知っている。「そうですね、やはりそういうお話はどうしても氣にするもので……偶然手に入つたチケットとはいえ、もし誘つて頂けるのであればもつと情熱的にお誘いして頂きたいです」

（これはカマトト!? 恐ろしい子……）

因みにかぐやの話には嘘がある。

浦島は知つてゐる。映画のチケットをこつそり藤原の家に投函していた四宮の事を愚痴つていた人物からその事を。

「私だつて恋をしたい年頃なんですから……」

この状況は余りにかぐやに有利である。

しかしそれを打破する為に白銀も必死にその頭脳で思考を巡らせる。

その様子を嗅ぎとつたかぐやもその手を封じる為に二手三手先を考え、お互いの頭脳で論理的にロジックを組み立て今までに勝者が決まろうと……！

「えーと恋愛映画が苦手ならとつとりトリノスケのペアチケットもありますよ？」

「んな!？」

（とつとりトリノスケ wwwww）

カオス理論

論理的に組み立てたロジックに一つのカオスが混入した事でその論理は破綻してしまつた。

もう一度ロジックを完成させる為には冷静にならなければならぬ。 「何だつたら俺がそのチケット貰つても良いよ？ 丁度誘いたい子もいるし」

その時四宮と白銀に電流走る！

まかさの第三者の加入により更にその場を搔き回されるとは思つ

てもみないからだ。

更なるカオスが溢れてしまいもう共に錯乱状態一步手前である。

因みに彼は本気である。

映画のチケットをタダで貰えるならそれはラッキーという考えと、ここで搔き回したら更に面白そうという下衆な考えをしているのだから。

「ええ！ そなんですか？ 浦島さん！？ そんな恋バナがあるなら何でラブ探偵の私に相談してくれないんですか！？」

「まあ風紀委員長としては風紀を守る事に重きを置いているし、他の生徒にそんな事を見られるのはあんまり良ろしくないと思つてね……でもチケットが使われない位なら映画でも誘つてみようかなあつて思つてさ」

浦島という男のやり方は実に理に叶つている。なんやかんやで映画へ行く事がおじやんにならない様に両者への牽制をするのと同時にとつとりトリノスケなる映画を妹と一緒に見たら喜ぶかなあと思つた位である。

そしてこの2つのカオスにより二人の思考は更に加速し急激にエネルギーを消費し正常な思考ができなくなる。

つまりは糖分が足りなくなつたのだ。

この生徒会室に残されてる糖分は饅頭ただ一つ！ つまりこの饅頭を手にした者が勝者となりえ……

「あーもうすぐ授業始まっちゃいますね饅頭頂きます！ 後で浦島さんに色々お話聞かせて貰いますからね！」

そう言つて藤原は饅頭を食べながら生徒会を退出していった。
「どつとりトリノスケの映画楽しみだなあ……」

「「そつちかよ（ですか）!?」」

この物語は天才達の恋愛頭脳戦を傍観したいけど何か見てたら茶々を入れたくなつてしまふ程この二人の事を好意的に思つてゐる浦島優良のお話である。

（さてさて今日は楽しかったよ白銀、明日はもつと樂しくなるよね四

富さん？

浦島君はフォームが大事

秀知院学園の生徒会会長を務める白銀御行は自己に対する評価が高い。

それもその筈だろうクラスで4～5番目位には入るであろう位にはイケメンであり、勉学については全国トップクラスであり身体能力も日々の新聞配達のバイトのおかげか中々に高い。

そんな彼は一部のメンヘラ気質の女の子からの人気がありバレンタインのチョコ（何かの毛入り）を貰つたりする事から自分はモテると思い込んでいるのだ。

しかし、そんな彼は陰での努力を惜しまない。今日も今日とて来週の体育でバレーボールの授業があるから誰もいなくなつた体育館で練習をしているのだ。

「よし……！」

そう言うとボールを高く上げサーブの練習に入ろうとしていた。苦手というだけあり、普通ならサーブがコートに入らないとかそんな感じだと普通は想像するだろう。

しかし秀知院学園の生徒会会長である彼がそんな事だけで苦手意識を感じると思うのが大きな間違いである。

彼は四宮に対しては素直になれないがそれ以外は基本的には善に属する人間である。

そんな彼が人前でプレーできないと思うのはプライドが高いからという訳でもなくただ単に皆の足を引っ張りたくないからという面と四宮にカツコ悪いところを見せたくないと思うからである。彼は努力の人なのだ。

ボールが落下してくるのを見計らいその落下地点に入ると思いつきりふむ腕を振り上げてそのまま目をつぶつて自分の後頭部とボールと一緒に叩くという神の御技を行つたのだ。

「な、何故なんだ……！」

こつちが聞きたいと思うのは仕方ない事なのだが、それはそれ、コレはコレである。

いくら下手くそな人間だとしても普通は空振りする位である。

「何故向こうのコートにボールがいかないんだ！」

えつ！そつち？

と客観的に見たらそう思うだろうがそれは外側からの人間だからこそ分かる事でありやっている本人は大真面目なのである。

「なあ白銀……もう理由は分かつてるんだろ？」

そんな彼の練習を手伝っているのは浦島である。

どうしても手伝つて欲しいというから来たまでは良いのだが、彼もどうしても手伝つて欲しいというから来たまでは良いのだが、彼も彼でこの状況を見て困惑を隠せない。

普通の徒競走やらは普通に運動できそうな人間の走り方をしている人間がこんなクリーチャーみたいな動きをするとは思つてもみなからだらう。

「やはりサーブの時に顔に当たつてしまつているのが原因か……」

「いやそれだけ？」

「他にあるというのか？」

「まずはフォームだよ綺麗なフォームを意識しないとこんな風に」

浦島はそう言つてボールを上げてサーブをするとコートが焦げ付く程の威力でサーブがラインギリギリで決まった。

「な？」

「ふむ確かに一理あるな」

その「な？」のどこに一理があるのかは平凡な人間には理解できないだろう。やはり天才たちの思考は凡人には到底理解できない。

この浦島という男はスポーツにおいては天賦の才能があり一度お手本を見れば自分の身体に最も適した動きで再現可能なのである。つまりこの男は天才、しかも感覚派の天才なのである。

そんな彼がスポーツを人に教える時にどうなるかと言つたらもつともらしい事を言つてゐるだけで何がダメか分かつていないので！つまりこの状況は八方塞がり！

二人で首をひねるばかりで何も状況は変わらないのである！

「あれ、会長に浦島君じゃないですか？こんな遅くにどうしたんですか？」

そんなところに現れたのは藤原である。

彼女は体育館に忘れ物をしただけで個々に偶然来てしまったのだ。

「いやちょっとバレーの練習してるだけだよ」

「おい！」

白銀にとつては自分の欠点は隠すべきものである。それが他人にバレるのは自分のプライドが傷つくのと同義。それは一番仲の良い浦島にさえ2日間悩んだ末やはり一人ではどうにもならないと思つたから恥を承知で頼んだのだ。

「え、会長バレー苦手なんですか？」

白金は悩んだ。藤原に自分がちょっとびりバレーが苦手だという事を打ち明けても良いのか……

先程も述べた通り白銀はプライドが高い。こんな事もできないの？と思われるのは自分のプライドが許さない…というよりは恥ずかしい気持ちが勝るのだ。

どうするべきかを考えているとそんな時、一匹の蝶々が体育館に迷い混んだのである。

「あー蝶々さんだ。わーい待つてー」

……藤原千花は音楽においては天才であり尚且つ語学においても非常に優秀である。しかしだ藤原は属に言う天然である。

つまりコイツにどう思われても別に良いやという気持ちに白銀は達した。

「実はなちょっとだけバレーが苦手で練習をしていたのだ」

そして打ち明けていた。

因みに浦島は白銀ができるだけこういった弱点を他人に曝すのは嫌がるのを知つてるので、ただバレーの練習をしているというフォローをしており、突つ込まれたら自分が手伝つて貰つていると言おうとしていたのだが白銀が自分で勝手に墓穴を掘つたのである。

「そうなんですか？会長にも苦手な物が存在したんですねー因みに私はバレーできますよ?」

そう言つて藤原は放物線を描くサーブをした。そのサーブは高校生のバレーをあまりしない一般女子のレベルではあるがサーブは

入った。

「すげえ！」

「へえ上手いもんだな」

藤原は煽てられるのが得意である。彼女は自分に対する称賛を全て受け入れる事ができる。つまりは直ぐに調子に乗るのだ！
「じゃあ会長と浦島君もやつてみて下さいよ、私もできる限りは協力しますよ」

吐いた言葉はもう二度と飲み込めない。彼女はこの秀知院学園を卒業した時に語っている。「安請け合いは絶対ダメ」これを語つている彼女の表情は普段の朗らかな表情ではなくムンクの叫びの様な顔をしていた事からこの時の後悔が伺える。

「な？」

「やつぱりフォームがなあ……」

あのクリーチャーの動きをやつていてどうしてそんな結論に至るのかは藤原にとつては不明である。

「いやまず目を開けて下さいよ！」

「え？ 目を開けて打つてんじやん？」

「え？ 目をつぶつても普通に入るじやん？」

白銀はそんな当たり前の事できているに決まつてんじやんと思い込んでいるし、浦島はその天才振りを発揮してしまっている。

しかしアドバイスを受けている身からしたら言われた通りにやるのが道理であるのでもう一度試してみた。

やはり後頭部とボールを器用に一緒に叩きつけている。ある意味では最強のセンスをしているとしか言いようがない。

「な？」

『な？』じゃないですよ！『な？』じゃ！？どうしたらそんな言つた通りにやつてるだろ？感を出せるんですか！？目を開けるつづてるんですよ！

こんな藤原は今だかつて誰も見た事がない。

「??？」

そして何故そんな事を言われているか分かつていなかこの二人組

に藤原は絶望した。

「じゃあ動画撮つてあげますから！」

そうして動画を撮つた事により白銀は自分のクリーチャー振りを理解出来て落ち込んでしまつた。

だが浦島は「スナップかなあれともインパクトの瞬間？」と大分見当違ひのことで悩んでいる。

藤原はコイツマジか!?みたいな顔をしているが何も浦島が悪い訳ではない。

実際目をつぶつてサーブを打とうが百発百中の制度であるのだから浦島の天才振りがかいまみえる。

「何でできちゃうんですか？」

「だつて息できる？ つて言われてもできるでしょ？ それとおんなじ感覚だわ」

そう浦島にとつてスポーツの練習とは相手と合わせる事だけである。自分の思つた通りに相手が動かないからこそそれを確認して相手に合わせる確認作業でしかないのだ。

そんな彼が人に教えれる訳もない。

「藤原書記、頼む俺にバレーを教えてくれ！」

藤原は恐怖した。このクリーチャーを人間にまで育てあげなればならないという事に……！

しかし自分から言つた手前逃げ出す事はできないし、白銀の不安そな顔を見ていると胸に詰まつてゐるその母性が顔を覗かせて断る事等できる事もない！

「……私の特訓は厳しいですよ？」

「コーセー！」

そんなこんなでバレーの特訓が始まつた。

まずはジャンプしながら目を開く特訓を行い、トランポリンに乗つて最高到達点で目を開く特訓を何百回何千回と行つたのだ。

3つの色のカードを持つた浦島が相手コートに立ち最高到達点に達した時点でその色のカードを当てる特訓も行つた。

その特訓は過酷を極めた！

最早目をつぶつてサーブの練習を行つた方が良いのではないか？と藤原は頭が過る程のセンスのなさに辟易としながらも彼女は諦めなかつたのだ！

そうして3日が過ぎた。

「会長、もう良いじゃないですか。普通の人とは言えないですが普通に下手な人位にはなつたじやないですかどうしてこんなに頑張れます？」

普通に藤原が酷い事を言つていると誰もが思うであろうが、ここまで成長できた事が奇跡なのである。

それもこれも藤原の特訓のおかげであるので白銀もそこに文句を言う事はない。ないが……！

「いやまだ付き合つてくれ……カツコ良い姿を見せたい相手がいるんだ！」

そう彼にも意地がある男の子なのだから仕方ない。好きな女の子にカツコ悪い姿を見せて絶望される方が今の過酷の特訓よりも辛いのである。

「え、会長好きな人いるんですか!? 教えて下さいよ！」

「う、うるさい早く続きをやるぞ！」

「青春だなあ……」

浦島は蚊帳の外にされている感があるが白銀の特訓に文句も言わずに付き合つているのは彼の責任感がかいまみえる。

そうして更に2日後、ようやくサーブが完成したのだ！

「ふう…なんとかこれでバレーの授業には間に合いましたね！」

安堵する藤原、藤原も藤原とて時間を割いてクリーチャーを人間に育てあげた事に対する達成感を感じていた。

「はあ…疲れましたよ。もう二度とこんな事はしたくない位です」

「はははそれに付いては感謝するが藤原書記、まだ何も終わってないじやないか」

「え？」

藤原困惑。白銀の言葉を理解できない。もう終わつた筈であろうあんな苦しい思いをしたのにまだ何があるというのか？それが全く

理解できない。

「バレーはサーブだけじゃないだろ？トスとレシーブも教えてくれ」

藤原は戦慄した。その通りではあるがサーブに懸けた時間と同等以上の時間がかかる事、それに何度も何度も同じ事を言つても理解されない事。その恐怖がまた彼女を襲つたのである。

しかし藤原にも意地がある。吐いた言葉は取り消さないしここで裏切つてしまふのも彼女の性格からしたらできる訳もないのだ！

「おっしゃ俺が教えてやるよ！サーブ打つてみな！」

白銀はその浦島の言葉通りにサーブを放つ。バレー部並の威力のサーブを軽々レシーブし、一人でトスをする浦島の姿がそこにはあった。

「やはりフォームが命だよ」

浦島は何も成長していなかつた。

「もういやあああー！！」

藤原の叫びは学校中に響き渡つたのであつた。

そんなこんなで体育でバレーをしているとそこには活躍している白銀の姿があつた。

その姿に四宮も思わずうつとりしてしまう。やはり惚れた男の活躍してゐる姿はカッコ良く映つてしまうものなのだ。

そして白銀は思わずといった感じで四宮の方を向いた。

そして四宮は隣にいた藤原の方を見て会長がこつちを向きました！と言つた表情を藤原に向かへた。

藤原は泣いてた。

「ええ…！」

親が成長した子供を見守る巣だつていく姿をみているかのような心境なのであらう。気付けば彼女は絆創膏と湿布の匂いでいっぱいであるし、指をテープで巻きまくつてゐる。

「かぐやさん、あの子私が育てたんです…」

「ええ!? 親になつたの!?!」

かぐやのその驚きと共に白銀はまたサーブを決めていた。

「うんフォームが良くなつた」

そして浦島は何も変わつていなかつた。

コレは天才たちの恋愛頭脳戦である。誰がなんと言おうと天才たちの恋愛頭脳戦なのである。

決して残念な人たちの残念なお話ではないのだ!

……たぶん。

浦島君は優しくしたい

生徒会には役職が存在する。

生徒会長が白銀御行で副会長が四宮かぐら、そして書記が藤原千花であるのが実はこの私立秀知院学園にはもう一人生徒会役員が存在している。

生徒会会計 石上優。

データ処理のエキスパートであり、白銀が直接生徒会の会計になるよう頼み込んだ程の逸材である。

彼は中等部の頃に不登校だった経歴がありそれを白銀が引っ張り出した事に恩を感じており、白銀の事を慕っているのだ。

「キンコンカンコーン 1年の石上優は放課後執務室に来るよう、繰り返す1年の石上優は放課後執務室に来るよう以上放送終わりキンコンカンコーン」

風紀委員会からの石上の呼び出しは毎度の事である。石上は模範的な生徒ではなく所謂ちょっと問題児であるのだ。

別に暴力を振るう訳とか授業中の態度がめちゃくちゃだとかそういう理由ではなく、単純に成績が悪いのだ。

後何故か人の地雷を見抜く事のエキスパートで人が隠している地雷を無意識に踏み抜く事に関してはこれ以上ないとも言える程である。

どうせクラスメイトの伊井野という風紀委員から呼び出しだからなんともなると思つて教室の扉を引くとそこに現れたのは予想外の人物であった。

「石上……流石に授業中にゲーム機を出すのはアウト」

「うげえ風紀委員長……」

彼は今、未曾有のピンチを迎えていた。

○

事の発端は休み時間にヘッドホンを着けてゲームをしており始業のチャイムを聞き逃してしまった事により、授業中に堂々とゲームをしてしまってそれを教師が激怒したからである。

何分その教師は眞面目で融通が利かない事で有名であり、そもそも学校にゲーム機を持つてきている事がおかしいという意見でその場でゲーム機を没収してしまったのだ。

しかも課題をプラスされるというオマケ付きである。

それを聞いた浦島は自分が直接指導すると言つて件の教師に石上のゲーム機を貰い受け、風紀委員がいつも使用している教室に呼び出したのである。

「……つてのが教師の言い分つて訳だな、まあ妥当も妥当でそこに弁明を入れる必要性すら皆無な訳だがその辺どうかな？」

「……はいその通りです」

石上は風紀委員長が苦手である。何が苦手なのかは自分でもよく分からぬが苦手である。

「……まあ休み時間に夢中になつてしまつて始業のチャイムを聞き逃してしまつたとかそんなところだらうけどなそこは注意しとけよ？ ゲーム機の持ち込みは俺的にはグレーゾーンだからさ」

浦島優良という風紀委員長はこの私立秀知院学園において生徒会長や生徒会副会長と比べても同等位に人気がある。

生徒達は彼を「泣く子も笑う風紀委員長」と呼ぶ程の人気だ。

相手の気持ちを汲んでいて尚且つ面倒見が良いからこその人気なのだろう。

「すいません。熱中し過ぎてしまいました」

それが苦手なところもある。自分みたいな奴でも平等に接してしまうところなんて明らかにおかしいと猜疑心が勝ってしまうのだから仕方ない。

「俺からは以上なんだが伊井野的にはもつと厳しくしてくれつて言われて困つてるんだよね……」

「ああ……」

石上と同じクラスである伊井野ミコは風紀委員会に所属している

女子であり学年で一番の成績を修めている模範生である。

正しい事を正しいと言いたいと言つて風紀委員会に入り自発的に風紀を正す為に奮闘している眞面目な生徒なのだが、少しやり過ぎな部分がありそれに対する文句が風紀委員長にまで上がっているのだ。「それにしたつて伊井野はもうちょっとだけ融通が利けば文句なしなんだが……」

「まあ伊井野的にはあれで大分手加減してるそうですけどね」

そもそも風紀という言葉を辞書で調べた時に「社会生活の秩序を保つための規律。特に、男女間の交際についての節度。」とある。

つまりは学校生活でいらない物は持つてこないようにしましようね。まだ自分で責任取れない年齢だから節度を持ちましょうね。という事である。

風紀委員長としてはあまりに束縛し過ぎるとかえつて反発してしまふ事があるこの多感な御年頃の学生達にはモラルと常識さえあれば

特に何もしないようにしている。

勿論ダメな事はダメだとはつきり言うし、その後のフォローも欠かさないがそれでもダメな人間には裏できつちり制裁を加えている。

因みに自衛隊では指揮の要訣という部隊を指揮する心構え的なモノの中に「自主裁量の余地を与える」という言葉がある。コレは任務を達成できるのであればある程度の自由を与えるという意味である。つまりは自衛隊の様なガチガチの規則に縛られるようなところでも人を動かす為にはある程度の自由は必要なのである！

「まあそれはそれとしてペナルティはあつてしかるべきなんで週末に行う風紀委員会主体のボランティア活動に参加決定だから」「うわあ…」

よそはよそ、うちはうち。

いくらそういう理屈があろうが元々許可されてないものはどうあがこうが許可されないので！

そんな決着を迎えたかに見えたのがそんな時に件の教師が執務室に入ってきたのである。

どうにも様子が気になつたらしい。

「浦島、石上の件はどうなつてている？」

「ちょうど今話しているところですよ。今後は絶対にしないと固く誓つてくれました」

「ふむ、……今回は浦島の顔を立ててたいがそれでは罰が軽すぎではないか？ゲームのデータを全削除位はするべきではないか？」

この教師は自分が学生時代にやられて嫌だつた事を平氣を学生にやらせようとしているし、やられていたから多分正しい指導なんだと勘違いしているのが質が悪い。それを当然だと思つてゐる事が人気の出ない理由とは考えていないだろう。

人間とは正しいと認識していることを否定されるのを嫌う。それは自分を否定されるのと同義でありこの教師も例に従つてそのタイプである。

だから風紀委員長もその提案に便乗するのだろうと石上は諦めていた。

「……石上会計、コレは生徒会に必要な書類のデータも入つてゐるのではないか？」

そんな時にふと浦島は石上にそんな事を確認しだした。

「はい？」

唐突な事でふいに言葉が出てしまつた。いや普通ゲーム機に仕事のデータは入れる訳がないのだからそんな言葉が出てくるのは仕方ないだろう。

しかし浦島は言葉を続ける。

「やはりか……利便性があるとは言え、それをゲーム機に入れるのは関心しないな」

どういう理由でこんな事を言つてゐるのか全く分からぬ、風紀委員長が自分を陥れる為にそういう事言い出したのかすら疑つてしまつてゐる。

「とは言え仕事に関するデータが入つてゐる以上は無闇にデータを破壊すれば、四宮さんにまで迷惑がかかるだろう……仕方ないな【次回】からは教室に持ち込む事はしないようにそして罰として風紀委員会

で活動している週末のボランティア活動に参加するよう以上で今回件は終わりだ。先生もそれでよろしいですよね？」

「う、うむ四宮君にまで迷惑をかけるのはよろしくないからな！」

そう捨て台詞を吐いて執務室から出ていく教師を見て石上もようやく意図が分かった。

こういったタイプの教師は立場を気にする。だから罰をさせないと自分が舐められていると思うので気に食わないのだろう。そして四宮という財閥の令嬢に迷惑を掛けて親にその事がバレたら自分の評価が下がるのではないかと気にしてたのだ。

だからこそこの言い回しなのだろう。流石は風紀委員長といったところか。

「ふう……石上、お前あのおっさん怒らせる様な事すんなよ？めつちやみみつちい奴だから面倒だし」

そう言つた浦島の姿を見て石上は不思議に思つた。何故自分を助けてくれたのだろう？あの場で正解は教師の言葉に頷く事が一番簡単な答えたはずなのに……

「何で助けてくれたんですか？別にゲームのデータ位消しても問題ないでしように……」

「ん？まあ俺はレトロゲーとかたまにするんだけどさ、それって急にデータぶつ飛んだりする訳よ、その時のイライラとかマジで忘れらんねえし、モヤモヤすんだよ」

「はあ……」

「マジで理不尽だからな、いざやろうと思つて電源入れたら【冒険の書は消えました】つてイヤイヤ何も悪い事してねえのに？とか思つて力セット投げた事なんて数えきれん」

正直何を言つてるんだろうこの人と思つた顔をした石上であるがそれも仕方ないだろう。

その顔を見て浦島は頬を搔きながら続きを話した。

「……まあ俺は自分の記録を消すのはさ、やっぱり自分の判断ですが一番だと思ってるんだわ。授業中にまでやる位ハマつてんだから余計にそう思つたんだわ」

浦島優良はこのエスカレーター式と言つても私立秀知院学園で数少ない外部受験生である。

家は平凡な家庭であるとは言い難いが裕福でも貧乏でもない。

そんな彼は誰よりも親身になつて色んな人間の相談に乗つている。ある意味ではこの学園の異物でしかない彼だが、だからこそ皆が見ている。

そんな中で彼は頑張つている人間を見捨てる事はないのだ。

「底なしのお人好しですね」

石上は思わずそんな言葉が出た。

「るつせえよ、お前にだけは言われたくないわ」

ここだけの話だが浦島優良は石上優に借りがある。

それを返さない限りは浦島は自分を許す事ができないし、できそうもない。

浦島はある時の事を誰よりも悔いでいる。その場にいなかつたら何も出来る訳がないのにと普通は思うかもしぬないが、彼は違う。石上が正しい事をしたとは言わないが自分の正義で人を守ろうとした人間が不当に扱われていた事が何よりも悔しかったのだ。

だから浦島は石上を可能な限り理不尽から遠ざけていた。ただそれだけの話だ。

「ていうか何のゲームしてたんだ？」

「言つても分かないとは思いますが虎ドラピーです」

「いや懐かしいなおい！神ゲーかよ！因みにどこまで行つた？」

「え……いやまだメインヒロインルートだけですね以外とコレ難しいんですよ」

「とにかく悪い事は言わんからモデルキヤラルートとソフトボールルートも普通に良いから」

そして浦島優良はオタクである事は白銀と石上以外知られていない。